HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	矢野秀武氏の書評に応えて
Author(s)	櫻井, 義秀
Relation	書評へのリプライ
Citation	宗教と社会, 12, 170-174
Issue Date	2006-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/17168
Type	journal article
File Information	shukyo12.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

矢野秀武氏の書評に応えて

櫻井義秀

初めに、本書を書評対象本に選定して頂いた『宗教と社会』編集委員会の諸先生方と、丁寧な紹介と適切な批判をしてくださった評者の矢野秀武さんに御礼申し上げたい。

矢野さんが冒頭述べておられるように、本書は東北タイの地域社会変動を叙述したものだが、宗教に直接関わる章は、全 10 章中 2 章にすぎない。しかも、その 2 章はタイ研究の最初の 2 作である。それ以後、開発僧の研究を例外として（『宗教と社会』第 6 号に掲載）、筆者は宗教以外のテーマを選んで調査してきた。その理由を説明しながら矢野さんから出された疑問に答え、かつ筆者が追求してきたタイ社会への問題意識を説明してみたい。

日本の先祖祭祀等の民俗宗教の調査から宗教社会学を学び始めた筆者の方法論は、イエ・ムラの農村社会学、或いは機能主義的な社会人類学だった。ここで扱われた「宗教」は、「社会」の一部であり、社会秩序を正当化する文化そのものだった。東アジアやアフリカの父系出自集団と祖先崇拝の関係を分析するには好適な認識枠組みである。また、コミュニティの文化・社会を実際に調査して、細々としたデータを有機的な連関をもった社会像にはめ込むには便利な手法だった。今でも文化と社会の相互規定性を前提に、けして証明はされないが反証されもしない文化論的説明が好まれる。

筆者の問題関心は、基層文化や公共宗教といった社会的価値の体系と、そのような価値を内面化して生活している人々の生き方にあった。祖先崇拝の論理には、理想的なライフコースに関わる価値が伺えたので、この「実践宗教」は社会学の研究対象になりえた。

おそらく、筆者が東アジアにフィールドを拡大したなら、しばらくはこの視点と関心で研究を継続していただろう。ところが、当時関わっていた NGO の関係で東北タイを次のフィールドにしてしまう。途方に暮れた。東北タイには、家族・親族の双系的な関係、生態系や商品経済、開発の政治に強い影響を受けた村落社会、民俗宗教に優越する公共宗教としての上座仏教等があった。小宇宙としてのコミュニティや、意味や機能に充ち満ちた文化を物語ること、いわば箱庭の微細な記述ではすまない現実がそこにあった。

最初の論文、「家族における互酬性の規範と先祖祭祀」は機能主義のしっぽを引きずっている。ブルデューの実践論や構造化の議論を参考にして、文化と社会の相対的自律性を前提に、社会的互酬性の領域が縮小しているにもかかわらず、宗教実践では互酬性が強調される点をイデオロギー化として描いたのが「宗教実践の構成と社会変容」だった。クワン儀礼の評価については、隣接世代間の互酬的保護－庇護の関係から、情愛的な関心を確認し合うメディアに儀礼の中身が変化しつつあると筆者は解釈した。また、タンバイアの機能主義的な村落コスモロジーの解釈を否定しながら、他方で彼の調査データを比較可能な資料として使用したのは矛盾ではないかという指摘がなされたが、もっともである。筆者はタンバイアが調査した 1960 年代であっても、村落を閉じたコミュニティとして機能分析をすることに無理があると考えたが、彼が残した年中行事や通過儀礼、邪霊祓除の儀礼に

関わる事例を比較の参照点とすることはできると考えた。確かに、厳密にはおかしい。

しかし、資料が「事実的事柄」に依拠している程度は、解釈をはぎ取り、事例のみ時代ごと、地域ごとつきあわせていけば、モーダルなものか、はずれ値であるのか、推測は可能であろう。人類学にしても、社会学にしても、時代ごとの「通常科学」や「思潮」の流儀に従ってモノグラフを書いてきたわけである。その語り方、書き方に問題ありとして先行研究を捨ててしまえば、社会史や比較社会論は相当な資料的限界に突き当たるだろう。

もう一つ、開拓農村時代の農地や労働力に関わる互酬性は失われても、冠婚葬祭の費用や出稼ぎのコミッション等、まとまった金を必要とする際、親族の協力関係は依然残っているという指摘はその通りである。親族をはじめ、近隣、職場、友人・知人の様々なコネクションは社会資本として立派に活用できる。誰の知り合い、配下にあるかは重要だ。

さて、「出稼ぎと労働者文化の形成」を調査したのは、農民から工場労働者としての時間と空間で生きることになった人々の価値意識を探ろうとしたからであった。筆者は、労働者が抱く労使関係や将来展望の少ない工場労働への違和感を、労働者自身による労働・生活空間の異化の端緒と希望的観測を含めて描いた。しかし、皮肉なことに、鎌田慧が『自動車絶望工場』『アジア絶望工場』と評したトヨタ・システムやアジアの労働集約的ローテク/ハイテク産業は、安定雇用と経済の底上げ効果をもたらした。その余波を受けて、日本の地方は産業の空洞化に泣いている。グローバリゼーションに国家や地域社会がどのように対応していくのか、経済領域を超えた社会空間における価値の変動に当時関心があった。

さて、政府の開発主義的政治や地域の資本主義経済システムへの包摂に対して、オルターナティブな価値観を表明し、新しい生き方を探そうとする人々もいる。篤農家や知識人・市民運動家が先行しているが、矢野さんは、タイ国内外における都市中間層によるアイデンティティの模索がタイの共同体文化の発掘につながっているのではないかと指摘された。

農本主義的・地域主義的な文化運動や、NGO/NPO による地域開発の「言説」と社会層の関連は大きなテーマである。実際、都市中間層のライフスタイルや社会意識は多様であるが、矢野さんの専門であるタンマカーイ（セクト的な仏教運動）の瞑想実践と教勢拡大の活動は都市中間層のセラピー文化と関連づけられて論じられたし、1990 年代の民主化運動に始まる市民社会論の勃興も都市中間層を担い手と考える論調が多かった。しかし、メディアやアカデミズムが好んで語る社会像と現実の社会には落差がある。その間を埋める作業こそ、地域の現実から論を構成していく地域研究の仕事だと思う。

こうした観点から、タイ農村社会論で論じられた互助の精神や、都市・産業社会論で論じられた階層化されたライフスタイル、価値意識を見ていかなければならないのだが、本書では、このフィードバックが十分になされていない。矢野さんの指摘の通りである。

なお、本書の体裁に関して、読者の想像力をかき立てるべく写真や巻末に統計資料をわざわざいれながら、調査地域の地図を挿入しなかったのは迂闊であった。調査票を入れなかったのは、農村、工場労働者、NGO/NPO の調査には定型的すぎる質問文を用いたが、結局は半構造化されたインタビューと自由回答に殆どの場合落ち着いていったからである。

本書はタイの地域社会で生きる人々のアイデンティティ形成を仕事や日常生活の様々な局面から描き出そうとしたものであるが、読み返してみると、筆者がタイ地域研究者として自己を確立しようとしてきた試行錯誤の足跡だけが目に付く。『社会学評論』や『現代社会学研究』『タイ研究』に投稿した論文では、地域研究と社会学的研究の間を往復しながら、家族、地域、労働、NGO/NPO、市民社会論といった領域ごとの問題状況と分析の理論を考えることに時間を費やした。その結果、1本書くのに2,3年かかり、同じテーマで継続調査する意欲を喪失し、次のテーマに移るという効率の悪い研究スタイルになった。領域の専門家にはなれなかった。しかし、地域社会の多様な問題群と取り組んだことは社会学の教師としては役に立っているし、「宗教」を複数の領域から考える視点も得ることができた。

そんな論文集を丹念に読み込んだいただいた矢野さんには頭が下がる思いである。『宗教と社会」誌上で自著を振り返る機会を与えられたことに再度感謝してリプライとさせていただきたい。